

「安心・活力・発展プラン2005」推進委員会委員発言要旨
—人材育成部会—

開催日：平成22年7月16日（金）14：00～16：00

場 所：トキハ会館 カトレア

出席委員：山崎部会長、山本委員、板井委員、小野委員
後藤委員、千竈委員、平田委員、堀川委員
松本委員

テーマ1 長期総合計画「安心・活力・発展プラン2005」の評価
と課題について

〔議事概要〕

(1) 計画期間の前半を振り返って

- ・施策の「生涯学習社会の形成と社会教育の推進」の指標が、「公立図書館の蔵書冊数」となっているが、本が増えることが「社会教育の推進」につながっているのか。例えば、「公民館の運営」の方がよいのでは。
- ・蔵書冊数は決して多いとはいえない。特に地方では本に触れる機会が少なく、不便なのが現状。
- ・NPO との協働の推進に関する取組として、県職員が NPO の現場を体験し、理解することは大変いいことだと思う。
- ・NPO の数は多いが、県民会議等のメンバーにはあまり NPO が参加してない。もっと NPO を積極的に活用し、こうした人たちの意見をいろんなところで反映させる機会を作るべき。
- ・歴史博物館は、すばらしい施設であるにも関わらず入館者数が少ないのは、場所と PR 不足が問題であると思われる。入館者数を増やすために、社会見学のコースに加えてもらってはどうか。ダイハツの工場には小学生が社会見学で多数訪れている。
- ・県内大学等の地域連携協定に関しては、事業の一環として共同研究に取り組む学生は増加しているが、学生が自主的に行う活動が減ってきているのが心配。
- ・総合型地域スポーツクラブの活動が停滞してきている。作ることも大事だが、既存のものをどう活性化するか考えることも必要。指導者の効果的な活用方法を検討すべき。

(2) 新たな政策・施策課題について

- ・蔵書冊数の多さは必要なことではあるが、評価としてはさらに、県民にその効果が出ているのか等、その使い方や用い方を検討することが必要では。
- ・新規学卒者の離職率が高いが、各分野で働く人の話を聞いたり、職場体験をするなどのキャリア教育の推進を目標に掲げることも考えるべき。
- ・キャリア教育以前に、家庭で仕事を与えることが大事。昔は家庭で何か仕事を手伝っていたもの。家庭での仕事の手伝いを小、中、高の中で評価してはどうか。
- ・芝居等を見る機会に恵まれていない。学校の体育館でもよいので、本物の文化に触れる機会を増やせば、文化への関心度が高まるのでは。
- ・障がい者、小児病棟患者などへの配本や読書ボランティアによる読み聞かせ、少年院への本の貸し出し等、本を借りることが困難な方へのサービスも必要では。

(3) 今後の方向性について

- NPO は、子育てや青少年といった県民会議等の場にもっと若い人を出席させることで、若い人の知識や現場の声を行政に活かしてもらうことが必要。
- NPO への事業委託が進んでいないが、まず行政職員に NPO というものを周知することが基本であり、各々の NPO の規模や得意分野を考えた上で協働しやすい形を作っていくことが大切。
- 最近では、NPO 同士が連携したり、ボランティアと連携して事業を展開する方向にシフトしている。事業も単年度ではなく、継続的なものにつなげていくためにも、いろいろなボランティアと協働していくことが大切。
- 歴史博物館の入館者数が減少しているが、小中学生の間に1度でも歴史博物館を訪問し、ガイドから説明を受けるような機会があれば、文化財や歴史を見る目が変わり、未来のリピーターの確保につながるのでは。

テーマ2 学校と地域住民との連携について

〔提案理由〕

(現 状)

- ・学校、地域、家庭が、それぞれの教育力の向上を図るとともに、相互に連携協力して子どもたちの健やかな成長をはぐくむことが求められている。(新大分県総合教育計画、教育基本法第13条)
- ・地域のことをよく知り、郷土愛を持った人材の育成が将来の地域の発展に不可欠であるが、それぞれの地域の歴史や実情を子どもたちに教えるには、地域住民の協力が必要である。
- ・県では、「協育」ネットワーク構築推進事業(学校支援ボランティア)や「放課後子ども教室」など、地域住民が参画した事業を実施している。

(課 題)

- ・地域人材の積極的な活用を促すための学校現場の理解促進。
- ・体験活動の指導者や子どもの安全を確保するためのボランティア等、学校・地域のニーズに応じた人材の確保。

〔県民の声〕

- ・放課後子ども教室では、地域の豊かなコミュニケーションが子どもたちもたくさん取れているので親としては安心。また小刀を使った作品作りでは子どもの目が輝いている。(22. 1. 26 県政ふれあいトーク)
- ・学力向上について学校・地域としての取組を考えてほしい。豊後高田市のように「寺子屋方式」で基礎部分のかさ上げに取り組んでほしい。(21. 5. 27 県政モニター)
- ・以前、小中学校の子どもが非行に走ったことがあり、校長先生から神楽を指導してはどうかと言われ、引き受けた。今では子どもがあいさつするようになった。(22. 2. 3 県政ふれあいトーク)

【議論のポイント】

①学校と地域の連携について

学校教育において、保護者や地域住民の参画を推進するために、学校がどのような取組を行うことができるのか伺いたい。(学校における教育活動等の紹介、開かれた学校づくり等)

②地域の支援について

地域住民は、地域における教育力の向上のためにどのような支援ができるのか伺いたい。(郷土に関する学びへの支援、異年齢交流、体験学習等)

③学校からの地域に向けた取組について

地域住民の参画を推進するために、学校から地域住民に役立つ取組ができないか伺いたい。(高齢者の参画による生き甲斐づくり、子ども観光ガイド、地区の清掃活動への参加等)

〔議事概要〕

(1) 連携の問題点

- ・学校のクラブ活動そのものの存在が問題となっている。外部からの指導者を入れるシステムができておらず、さらに指導者に対する謝礼や、安全性の確保の問題等が解決されていない。
- ・ボランティアの研鑽の場がなく、質のばらつきが大きい。また、学校側の受け入れ

姿勢が、「単にやってくれればいい」というものであったり、「授業の一環として高い位置づけ」であったりと、温度差が大きいことも問題。

- ・最近の学校は、学校便りの地域配布や、校長や教職員の地域行事への参加等、積極的に地域と交流を持ち開放的になったが、逆に保護者が閉鎖的になっているのではないか。
- ・今は、学校だけでは子どもが育てられない時代。学習サポーターやゲストティーチャーの活用、登下校時の安全確保等、地域との連携はせっぱ詰まった問題。

(2) 連携の推進方策

- ・学校内の必要なところに、必要な人物を連れて行くというシステム作りが必要。
- ・地域の規模にもよるが、学校長が直接、地域住民に地域の歴史案内や稲作りの田の提供等の依頼をしている。
- ・他組織が作成した、人材バンク（障がい者スポーツ指導員等）を活用し、目的に応じた指導員を派遣してもらうことが大事。
- ・地域の高齢者と子どもたちをつなげるファシリテーターとして、大学生を学童保育の場で活用する。
- ・読書ボランティアの姿勢が大事。ただ読めばいいというものではなく、ボランティアが何につながるのか、なぜボランティアが必要なのかということまでを考えなければならぬ。
- ・地域住民は学校に関心を持つことが重要であり、関心を持った人が、地域と学校のコミュニティーづくりの核になっている。
- ・地域には、様々な得意分野（わらじづくり、稲作り、地域の歴史、各教科等）を持った退職者が多くいる。地域の人にどういうことができるのか登録してもらい、各々の専門分野と学校の間を取り持つコーディネーターがいると上手くいくのではないか。
- ・今は親が自分の子どもしか見ていないし、学校に対するクレームも多い。地域をあげて学校をバックアップし、苦情の解決に協力するようなプロセスを作ることも大切。
- ・地域住民にとって学校へのボランティアは、「学校の手伝いをするボランティア」ではなく、自分の生き甲斐であり、生涯学習のために学校に関わっていくといった気持ちを地域の人に持ってもらうことも大切。

(3) 学校の役割

- ・祭りへの協力など、学校が地域を支援するといった姿勢を持つことも必要。
- ・子どもたちが農家への民泊を通じ、お年寄りとの協働作業を体験するなど、学校が地域に出て行くことも大事。
- ・高齢者大学等の取組に、子どもたちを積極的に参加させ、大人が学ぶ姿を子どもに見せるのも大事。